

龍谷大学 佛教文化研究所 新報

第 41 号

仏教文化研究所の思い出、 そして今後への期待／閉所にあたつて

仏教文化研究所所長 能仁 正顕

今年度をもって五十六年間掲げた「仏教文化研究所」の看板を下ろすことになった。長年、「仏文研」の名称で慣れ親しんだ一人として寂しさを感じずにはいられない。

その間に就任した所長は二七代を数える。その時代、そのとき毎に、ご苦労があったことと思います。今日にいたる仏文研の歩みにおいて、本所報を創意された第十二代武内紹晃所長は、仏文研の確固たる歴史を築いてくださった一人に数えることができるであろう。所報を読み返してみても、学内外・国内外の仏教およびその周辺の研究者がもてる能力を十分に発揮できるような研究体制を整えるべく、取り組んでこられた熱い思いが伝わってくる。私事であるが、奇しくも、小生が大学院に入学し、唯識思想をご専門とする武内門下に飛び込んだときは、先生がちょうど所長を務めておられた頃になる。それ以来、生涯にわたってご指導をいただいた恩師であり、先生にはしばしば叱咤激励の温かい言葉をいただいた。しかし、それが今更ながら、研究活動の活性化は人材の育成があつてこそ実現される、という先生の信念をもって発せられた言葉であつたことを、この身をもって感じている。

もう一つ、課題として「一層グローバルな仏教文化の発展を期する」ということが語られている。それと関連して、記憶に残るところを記しておこう。かつて旧大宮図書館二階に特別指定研究・仏典翻訳研究会（旧、龍谷大学仏典翻訳部「FIC」）の会議室があつた。RTCは、一九五八年に主に浄土教関係のテキストを英訳し出版することを事業内容とし研究機関として創設され、一九八八年に仏文研に組み込まれた。そ

の部屋で一九九九年十二月、『往生論註』の英訳ミーティングをしている最中であつた。当時、真宗学の武田龍精先生（本学名誉教授、第二二代所長）をチェアマンとし、仏教学では故長尾雅人先生（京都大名誉教授）や今は亡き山田明爾先生（本学名誉教授）といった錚々たるメンバーが学内外から参加していた。そのとき、新聞社から電話取材が入った。中国・チベットのパラ宮で発見された「維摩經」の梵文写本について、コメントを求められた長尾先生は、貴重な発見であり今後の研究が期待される、といった趣旨の発言をされていた。「維摩經」のチベット語訳からの翻訳をはじめ、大乘仏典の現代語訳に力を注ぎ、仏教の普及に尽力されたのが長尾先生であつた。その情景が今も脳裏に焼き付いている。晩年、山田先生は、維摩居士のような在家信者が仏教の伝道と積極的にかかわっていることに結びつけて、舍利供養にかかわる碑文などの考古資料の研究を深められた。このように新たな発見は研究者に刺激を与え、研究に波及効果を及ぼし、新たな知見を生み出していく契機となるのです。そのような梵文写本をはじめとした古典テキスト、図像や歴史史料が国内外の研究機関や研究者と協力しながら進められています。

栄えある「仏教文化研究所」の伝統は、決して一部の研究者の功績によって作られたわけではなく、数多の研究者や事務職員の思いと努力が結集されたからこそであつた。私たちはそのことを決して忘れてはならない。ここにこれまで「仏教文化研究所」を支えてくださった関係者の皆さまに感謝の意を表する次第であります。

このような伝統ある「仏教文化研究所」を閉所する任を負うことは慚愧に堪えない。歴代所長のもと、指定・共同・常設・特別指定などの特色のあるプロジェクト研究を推進し、その一部は仏教文化研究所紀要・龍谷大学善本叢書・研究叢書・仏典翻譯シリーズとして刊行されました。また国内外の著名な研究者や若手研究者によるセミナー・講演会・研究談話会などを開催し、研究者のみならず一般の方々にも多数ご参加をいただいで、社会還元を行ってきました。また毎年、海外から訪れる多くの研究員を受け入れ、仏教文化の多角的な研究の支援を行ってきました。まさしく仏教研究の国際的なプラットフォームの役割を担っていたのが本研究所でした。その果たしてきた役割は、今後「世界仏教文化研究センター」に発展的に引き継がれます。「仏教文化研究所」が蓄積してきた資産を土台として、基礎的な研究はより深く、国際的な研究者間の交流・情報発信はより盛んに、現代社会の苦悩に向き合った応用的な研究はよりの確に行われ、龍谷大学に新たな歴史を刻んでくれるであろうことに期待感もふくらんでいる。